



## 落語とIT

### ■ 桂 三枝

落語には古典落語と創作落語と呼ばれるものがあります。古典落語といっても最初は創作されたものであり、それがさまざまな落語家によって語り継がれ時代を経て今日まで残っています。その時代の人々のくらしや社会を表現するなかで、時代を超えて理解される普遍的な『笑い』が残っているのです。ですから、新しく落語を創作する場合は、時代を超えて通じるよう、流行のものは入れないほうが良いとされています。ITもその中のひとつとして捉えられているのですが、私は違うと思っています。ITというのはこれから先、進化はしてもなくなりはありませんし、現代社会を表現しようとしたときに、重要な意味を持っていると思うからです。私の作った「めるちゅう一家」という落語は離れて暮らす高齢の父に携帯電話を持たせて安否確認をしようとする家族がモチーフです。これなど携帯電話がない時代には作れなかったものですが、これから先携帯電話が別のものに進化したとしてもおそらく理解してもらえらると思います。

実際、最近あまりにもITの進歩が早く、多くの人にとってはついていくだけでも大変なのではないかと思っています。しかし、古典落語しかしない落語家でも、高座を降りれば、携帯を使いこなしているとか、パソコンにやたら詳しいとか、今の時代を理解することは古典落語をするうえでも大事だと思います。観客との間の共通認識こそ、落語の重要な要素であり、

■ 桂 三枝  
落語家

1943年生まれ、大阪府出身。2007年菊地寛賞、2006年紫綬褒章、芸術選奨文部科学大臣賞、1983年および2003年文化庁芸術祭賞大賞受賞ほか。1981年より創作落語を発表、現在200を超える。2003年に第6代目上方落語協会会長に就任。 <http://www.e-sanshi.net/>



それをとらえるために、落語家も日々努力する必要があると思います。

私自身も普段落語はパソコンで書いていますので、ITの恩恵を受けています。それ以外に携帯電話とiPhoneとiPadの3つを常に持ち歩いています。携帯電話は通話とメール用、iPhoneはブログ用です。iPadではコンテンツをダウンロードして遊んでいます。移動時間の退屈しのぎにコンピュータ将棋や麻雀をよくやります。将棋は最近なかなか勝てなくなってきたと思っていたらプロを破るほどになったと聞き、技術の進歩を感じます。弟子に漢字の読みや四文字熟語の意味を当てるクイズをやらせてその正解の低さを叱るという楽しみもできました。とはいえ、こういう機器を使いこなすのは弟子のほうがはるかに早い。「これやってみ」と渡すとすぐやれる。あれはなぜなのでしょう。携帯も私が新しいものに買い替えて戸惑っていても弟子はちゃんと動かせる。まあ、落語は教えているのですから、弟子から教わることもあってもいいんじゃないかと思います。これもまた時代の諸相のひとつであり、落語のネタとして後世に伝えていきたいと思っています。

—— 新作の携帯弟子が先に持ち ——

